

座長のまとめ

第1群の座長をつとめて

坂井 恵子・窪 のり子
(石川県立総合看護専門学校)

第1群は4席の演題で、第1席・第3席は事例研究、第2席・第4席は調査研究であることから、前者と後者2席ずつ、座長が担当することとしました。(第1・第3席-窪 第2・第4席-坂井)

第1席金沢市立病院、岡安敦子さんは、透析患者の自己効力に及ぼす看護婦の言動を、カウンセリング技法を用い、面接介入により確認し、更に、方向性をも明らかにするという先取りの事例研究でした。東大式エゴグラムや自己効力尺度を用い、前後に評価し、介入により変化はみられなかったと示されていた。

第2席金沢大学医学部附属病院、中尾弥生さんは、皮膚障害が残存している放射線治療を受けた患者に対する退院後の調査である。皮膚障害は、退院2～3ヶ月で改善傾向にあるが、新たな副作用の出現を心配していること、現在も照射部位に注意していること、放射線治療に対し誤った認識を持ち、不安や疑問を抱いていることを明確にされた。

第3席金沢市立病院、山中紀子さんは、CAPD

をセルフケアしていた状態から左腎腫瘍で手術となり、一時的に他者依存から再びセルフケア確立に至った看護援助についての事例研究である。まず患者の心理構造を明らかにし、個別的な援助要素を導き出す迄の過程を分析された。

第4席公立加賀中央病院、池端弘美さんは消化器術後患者の退院後の不安調査である。不安は、年齢、入院歴、疾患といったカテゴリーではなく、患者個々によるものが大きいとスライドで示された。

多数の会員からの質問・意見は発表者に伝わり応えて頂いた。その意味から言えば、今回の趣旨に添えたと言える。今後の研究の質向上に向けて、新しい第一歩を踏み出した感を強くした。しかし、限られた時間内に多くの内容が行き交うことで、何が論議の焦点か、何が研究のポイントか、思考が不明確になることもあったと思われる。座長として、進行に時間的・精神的余裕を持ちつつ焦点を絞る配慮が必要であったと思う。また、発表者の主張が明確に伝わったか、会場から意見を引き出せたか、と貪欲に役割を意識する必要性を感じた。